



私たちの活動を応援してください。



●入会のお誘い

プロジェクト保津川の活動を支援したいとお考えの方であれば、どなたでも会員になって頂くことが可能です。
また、会員になると以下の特典を受けることができます。

- ・会誌のお届け
- ・各種イベントのご案内・ご優待
- ・総会へのご案内（正会員のみ）

◆年会費

正会員（個人）	5,000 円
賛助会員（個人）	2,000 円（一口）
賛助会員（法人・団体）	10,000 円（一口）

●寄付のおねがい

プロジェクト保津川では、保津川の環境保全事業を推進するために、さまざまな形での寄付を募っています。ご寄付は会費とは異なり、どなたでも、いくらかでも受け付けております。お寄せいただいた寄付金は、保津川の環境保全活動に広く活用させていただきます。

京都銀行亀岡支店

口座名義：特定非営利活動法人 プロジェクト保津川

講座番号：（普） 3449691

郵便振替

口座名義：特定非営利活動法人 プロジェクト保津川

口座記号番号：00930-2-323170

（郵便局備え付けの払込用紙をご利用ください）

※詳しくは、プロジェクト保津川事務局まで
お問い合わせください。

理事会

顧問 上田 正昭（京大学名誉教授）

代表 原田 禎夫（大阪商業大学）

副代表 大西 信弘（京大学園大学）

豊田 知八（JPN 斯道会）

理事 河原林 洋（農業）

坂本 信雄（京大学園大学）

茂野 晃史（アールアイ）

豊田 覚司（京・くるかる隊）

中野 恵二（ひのまる米工房）

早田 和仙（CoCoMiteMi）

松本安寿香（ハラウ・フラ・オ・カワイルナ）

森田 孝義（保津川遊船企業組合）

山田 達也（保津川遊船企業組合）

監事 田中 秀門（亀岡市）

山内 俊房（亀岡市）

推薦のことは

素晴らしい自然と、長い歴史を持つ保津川をどのように再生するか。その為には、何よりもまず、私たち一人一人が保津川の魅力を知る事が大切です。

山と水の自然に恵まれた、まさに山紫水明の我が国を代表する川である保津川。

プロジェクト保津川のこれからに大きな期待を寄せています。

京大学名誉教授

上田正昭

連絡先

特定非営利活動法人

プロジェクト保津川 事務局

〒621-0804 京都府亀岡市追分町谷筋 37-21 フラット HOUSE

TEL / FAX : 0771-20-2569

<http://hozugawa.org> / info@hozugawa.org

プロジェクト保津川
Save Hozu River Project

特定非営利活動法人

プロジェクト保津川は、

流域の住民、企業、各種団体、行政とのパートナーのもと、保津川の環境保全を通じて循環型地域社会、そしてまちづくりに貢献することを目指して設立されました。

定例清掃会

保津川クリーン作戦

(毎月第3日曜日に実施)

朝の散歩の気分ですょっという事してみませんか？

ほうっておけない保津川のごみ。

プロジェクト保津川では、毎月第3日曜日に、亀岡市内の保津川流域で定例清掃会「保津川クリーン作戦」を行っています。

誰でもかたんに参加できるプログラムです。

お友達と、ご家族と、お気軽にご参加ください。

保津川ゴミマップ

インターネットをつかってリアルタイムで監視する

保津川やその支流に捨てられているゴミを見つけたら、携帯電話で写真を送るだけでインターネット上の「保津川ゴミマップ」に反映されます。

寄せられた情報はデータベース化され、行政機関や警察との連携によりゴミの回収が行われます。

さらに、ゴミの不法投棄防止にも役立てられています。

<http://gomi-map.org/>

保津川が今、泣いています。

川めこと一緒に考えてみませんか？

丹波から京の都へ通じる、四季折々の美しい表情を見せる保津

川（桂川）は、平安京造営よりもさらに昔、長岡京に都があった

ころから丹波地方の豊かな資源を都へと運ぶ大動脈でした。また、

丹波の人々にとって保津川はふるさとの象徴そのものというべき

川でもあります。しかし、その保津川が今、泣いています。

ゴミの不法投棄や水質悪化など、川を巡る問題があとをたちません。解決するためには、皆さまの力が必要なのです。

シンポジウム

保津川クリーン作戦や保津川ゴミ

マップなどの成果をふまえ、保津

川の現状とこれからや、全国の川

のことについて話し合うシンポジ

ウムを開催しています。

(年1～2回開催)

環境教室

保津川の豊かな生態系を楽しむ

学べるイベントです。お子様も

一緒に是非ご参加ください。(年

1～2回開催)



筏復活プロジェクト

1300年もの昔から、京の都を支え

てきた保津川の筏流し。

60年前に途絶えてしまった筏流し

の復活を通じて、伝統技術の継承と

山と川、街のつながりを考えます。

